
イケニエとカミサマ

神崎みこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イケニヒとカミサマ

【ZINE】

Z6167Z

【作者名】

神崎みこ

【あらすじ】

世間知らずだが容姿だけはよい少女は、ある思惑をもってカミサマと自称する男の下へと送られる。ゆるゆるとした時を供に過ごしながら、少女は己の立場と、カミサマのことを知るようになる。誰からも必要とされなかつた少女と、カミサマとのゆるやかな交流譚。

その一

「起きたか？」

知らない声で、あたしは起きた。
やっぱり、知らないところで、知らない人で。
びっくりするほどキレイなそれは、キレイに笑つて、そしてあたし
はまた氣を失なった。

うつ そうと生い茂る木々の中、獣道しか存在しない森の奥には、
古びた小さな社が鎮座している。年季の入つたと思われる木材は、
ところどころ朽ち、それでも寂れた印象を与えないのは、きちんと
手が入つている様子が見受けられるからだろう。

本尊を守るために閉じられた扉の前には、供物を捧げる台が置かれ
ている。米と塩が盛られた小皿が供えられ、その両脇には、朝活け
たであろうまだ瑞々しい花が色を添えている。

暗色に支配された空間に、そこだけ灯りがともつたようでもあり、
その社が今でも人間に忘れられていないことを強烈に訴えかけてい
た。

そんな、ある意味俗世とはかけ離れた空間に、昨夜一人の少女が置
かれ、その姿がなくなつたことを知るものは、その社を守る村民た
ちのみであった。

朝、社の世話をしに来た村人は、少女がいなくなつたことを発見し、
安堵した。

彼らの神が、少女を受け取つてくれたのだと。

そして空を見上げ、僅かに覗く青い空を睨みつけた。

神様が、彼らの供物を受け取つたのだから、早晚雨が降るはずである、と。

彼はこの僥倖を伝えるため、来た道を戻つて行った。
一人の少女を山奥に放置し、その後どうなるのかを頭の片隅に考えることもなしに。

「いいかげん起きないか?」

少女は幾度目かの声掛けに、よつやくゆるむと目を開け、おぼつかないながらも半身を起こした。

肩上で綺麗に切りそろえられた黒髪は美しく、彼女の白い肌をよりいつそう際立たせている。一見すると人形のような少女は、だが、口を開けば十中八九の人間が落胆するほどひの態度を見せた。

「誰?あんた」

「人家に勝手に転がり込んでおいて、よく言つ」

「はあ?つていうか、ここどこ?」

「どこつて言われると、困るが」

少女はきょろきょろと周囲を見渡し、ここが彼女の知らない場所であることを確認する。

「あたし、友達のうちに泊まつたはずなんだけど」

男は彼女を凝視し、そして嘲るような笑顔を浮かべた。

「ふーん、そつか。でもそれ、本当に友達?」

少女は小首をかしげ、彼が言つた言葉を反芻する。

確かに彼女は、少女にとつてただのクラスメートであり、実家に泊まりに行くほどの仲ではないはずだ。

どういうわけか熱心に少女をさそい、深く考えずにその話にのつてみれば、今現在このような状態となつている。

実は、少女自身もよくわかつていないのだ。

どうして、ただのクラスメートの誘いに乗つたのか。
そして、どうして自分は今こんなところにいるのか。

「君、生贊にされたみたいだねえ」

「イケーハ？」

「そう」

彼女は自分の理解が出来ない話をする男を見上げ、悪態をつく。

「ばつかじやないの？なにそれ？もうすぐ世紀末だつていうのになに古臭いこと言つてるわけ？」

「時が止まつた空間というの、意外とビックリでもあるものだ」

胡乱な視線を送られ、だがそんなことを鼻にもかけない男はさらつと話題を変える。

「名前は？」

「佐々木礼奈」

それに素直に応えた少女は、何かが自分の中を通り過ぎていく感覚を覚えた。

「…………もうちょっと疑ひごとを覚えた方がいいと思つた

ど。まあササキレイナね

礼奈は精一杯の虚勢をはつて彼を睨みつけた。

置かれた状況が異常であったため、礼奈自身気がつかないでいたのだが、目の前の男は、さらにそれを上回るほど異常だ。

光沢のある灰色の髪、同じ色をした瞳、陶器の人形にも似た白く滑らかな肌。そのどれをとっても人間離れしたものではあるのだが、何より彼の持つ雰囲気が特異だ。

礼奈は頭がよくない少女ではあるが、これぐらい突出た異変を嗅ぎ取れないほど愚かでもない。

「あんた、だれ？」

「僕？ カミサマ」

せせら笑うように男が答える。

常ならば、そのような言葉を吐き出す人間は、よほど愚かか、よほど狂っているどちらかである。だが、礼奈は、どうにうわけか彼の言葉を真実だと感じ取ってしまう。

そんなはずはない、という心のどこから湧き出る反証すら押さえ込み、礼奈は彼に見入る。

「そんのでも見られると照れるな、おまえ顔だけはいいし」

「かお、だけ？」

現実逃避なのか些細な言葉尻にひつかりを覚え、礼奈が反論する。

「ああ、おまえは器だけのからっぽだ」

「からっぽって」

「反論できるのか？」

妙に威圧感のある彼の言葉に、礼奈は黙る。

「勉強できない、しない、運動嫌い。そして家族にも友達にも嫌われている、だろ?」

どうして、とも、なぜ、とも口に出せずに礼奈はただただ呆然と彼を見据える。

「まあ、だからといつてこんな田にあつていいわけじゃないけどね」

男は、徐に礼奈の腕をとる。

真っ白な手首には、赤黒い痕が残っていた。

身に覚えのない礼奈は、混乱した頭のままぼんやりと手首の痕に視線を合わせる。

田常で、こんな痕ができる生活を礼奈は送っていない。

普通に学校に行き、授業を適当に受け、適当に友達と遊ぶ。

そんな毎日を送っていたはずなのだ。

唐突に置かれた今の立場と、田常があまりに乖離している。頭も気持ちもついていかない。礼奈は、ふと気が遠くなるのを感じた。

「それに、胸小さいしなあ」

「やかましい！これから大きくなるわー！」

だが、男の声に一気に現実に引き戻され、彼女はあれほど威圧感を感じていた男に拳を振るつていた。

それを易々と受け流した彼は、にやりと笑う。

「まあ、可能性は低いこと言わざるを得ないに決まり、がんばってみるか?
時間だけはやたらとあるからな」

その彼の言葉の意味を真に理解できたのは、もつとずっと後になつてからのことだった。

その二

あたしはわからなくて、夢の中で必死に助けを求めた。朝起きて、現実は何も変わっていないことに気がついて、はじめて泣いた。

泣いたままの礼奈を見下ろした灰色の男は、つまらなそうな顔のまどっかりと腰を落とした。

畳敷きの部屋に敷布団、という典型的な古い日本の寝具の上で、礼奈は混乱のあまりただただ泣き続けていた。

響くのは彼女の嗚咽のみ、といつこの空間は、八畳ほどの寝具以外は何もない部屋だ。三方が襖で囲まれ、一面だけが障子の扉で閉ざされている。障子からは外からの明りがもれ、すでに日が昇って久しいことを教えてくれている。

「あんた、慰めるとかしないの?」

しゃくじあげながらもよひやく泣き止んだ礼奈は、開口一番憎まれ口を呴ぐ。

男は、たいして気にもせずそれに軽口で答える。

「なんで俺が

「女の子が泣いてたら慰めるのが男の仕事でしょ?」

「そうされるだけの価値がある女ならね」

「どうこうことよ」

「そのままの意味だが?」

礼奈は、一般的に美人と呼ばれ、異性にはちやほやされることが多い。同性にはその性格から敬遠されていたのだが、それを「妬み」だと決め付け、彼女らを見下していた。当然彼女の周囲には、似たような意識の人間しかおらず、もてはやした男たちもまた、それに釣り合う程度の人間ばかりであった。

見た目だけは華やかな、中身は乏しい人間たちの集団。礼奈のいたグループはそう曰され、遠巻きに見られていたことを彼女は知らない。

だからこそ、こんな風に面と向つて彼女を批判した異性は初めてで、心細さと混乱から、口調がさらになるとがつたものとなっていく。

「あたしの何がわかつてんの？」
「少なくともおまえよえりわかつてていると思つが？」

目の前の男は、初対面の謎の男だ。

しかも、自称カミサマといふ世迷言をためらうことなく口にするほどの。

だが、どういうわけかそれら全てを飲み込んで、礼奈は対峙していれる男が、人間ではない何か、ということを認めつつあった。

「まあ、時間はあるからな。少しは勉強したらどうだ？ そのからっぽの脳みそが少しはましになるんじゃないか？」

「いやよ！ あたしは帰るんだから」

じつと、灰色の男は灰色の瞳で礼奈を見つめる。

その視線に耐えられなくなり、彼女は顔を逸らす。目に付いた置みの縁は新しく、どういうわけか、森の中で見かけたような気がした、手入れされた古びた社を思い出した。

「どうした？」

優しさのかけらもない男の言葉に、礼奈は再び彼と視線を合わせる。射抜くような視線は、何もかもを見通されているようで、彼女はそれを避けるようにしてうつむいた。

「どうするの、おまえは捨て子みたいなものだな？」「違う」

自分の何をわかっているのかもわからない男が、正確に彼女の状況を暴きだす。いたたまれなくなつて思わず掛け布団を握り締める。

「じゃあ、君がいなくなつて、誰が君を探すのかを言ひじりん？」「それは」

うつむいたまま、誰の名前も挙げられない自分に、礼奈は知らずに再び涙をこぼす。

あふれ出る涙は、先ほどのものとは違い、憐憫の気持ちが強く出た涙だ。

そう、彼の言つことは、全てがあたつているのだから。

「いたぶりたいわけではないんだがな」

彼は立ち上がり、そして静かに障子を開け、部屋を出て行った。残された礼奈は、耐え切れずに布団に突つ伏して声を上げて泣いた。

誰も、助けにはこない。
誰も、探しにはこない。

それを知っていたはずなのに、突きつけられた現実は、もつとずっと冷たいものだった。

礼奈は、普通の家に生まれた一番田の女子だ。

同居していた父方の祖母は、彼女を溺愛し、共働きで働いていた両親に代わって彼女を育てた。いや、どちらかといえば、礼奈を取り上げ、その母親業を実母から取り上げたともいえる。そのせいなのか、礼奈は祖母にはよく懐き、そして実母には壁をつくるような少女へと成長した。

そのまま行けば、ただの三文安の子供、というわけなのだが、皮肉なことに一番田の子供が生まれたことから彼女の生活が一変した。次の子は待望の男児だったからである。

祖母は狂喜し、再び取り上げるべく、あれこれ采配をはじめた。しかし、年月というのは残酷なもので、祖母は老い、そして実母は強くなっていた。

祖母の支配を良しとはしない実母は、産後すぐ息子だけを連れ彼女の実家へと逃げ帰り、そして戻つてはこなかつた。あつという間に家族が瓦解した佐々木家では、全く何も言わず何もしなかつた実父でさえ、家を出て、彼の妻、つまり礼奈の母と息子と暮らし始めた。

取り残されたのは老婆と孫娘。

そして、彼女はろくな躾も教育も受けてはいない、典型的なわがままな少女だつた。

祖母は、あれほど溺愛していたにもかかわらず、手に入らなかつた孫息子を嘆き、手に負えなくなつた孫娘を嫌悪した。顔をあわせることもない二人、礼奈の様子さえ氣にもならない両親たち。悪くなつていく素行も、彼らにとつてはただただ迷惑なものでしかなかつた。

ひとかけらの心配すら、礼奈には『えられなかつたのだ。

泣きつかれ、そのまま寝入つてしまつた礼奈は、再び日の明るいうちに目を覚ました。

瞼の腫れをかんじ、せめて洗顔だけでも、と立ち上がり、初めて部屋を出た。

襖を開けた瞬間、ガラス戸の向こうに、一じんまりとした庭園が目に入った。それを見入り、しばし立ちすくむ。涙が、再び伝つてきたことにも気がつかずに、礼奈は、ただただ立ち尽くしていた。

「まじょ

唐突に何かが頭の上に投げかけられ、それが手ぬぐいだと気がついた。

いつのまにか男がすぐ側まで近寄つており、礼奈は見慣れない彼に小さく驚いた。

「顔洗つて来い」

黙つたまま頷き、彼の言われるまま、洗面所で顔を洗う。

普通の水道水より冷たいそれは心地よく、礼奈はかが落ちていくような気がした。

「来ちまつたもんは仕方がねえ。多少の面倒はみるが、まあ期待はするな」

ここがどこなのか、どうして自分がいるのか、という根本的な疑問を残したまま、彼と礼奈の同居生活が開始された。

「どうしてあたしがここにいるのか、あたしは知らない。
だけど、ここにいていいといつ男の言葉は、あたしにはとても気持ちが良かつた。

「つていうか、あんた名前は？」

「あんたって言うな。言葉遣い悪いなあ」

「人のこと言えないじやん」

本能的な恐怖すら覚えた男の家に、礼奈はあつさりと住み着き、すでに幾日か経過していた。
誰が用意しているのかすらわからない朝食を田の前に、礼奈は唐突に疑問を口にした。

「カミナリでもカミナリでもカミナリでも、ビリビリビリビリ

「自由じゃないじやん」

「どうせ名前なんてないしな」

香がたつ味噌汁を飲みながら、男が囁く。
それを嘘だ、とも、からかいだともといはずこそ、礼奈はただ同じよつに汁物を口にする。

「おこしご。まあいいや、それで」

あつさりとやうべ解し、一人は沈黙のまま質素な朝食を再開する。

礼奈は彼に名を聞かれてから、彼の言葉の真偽を体のどこかで感じ取る、という不思議な感覚を味わっている。

彼の言葉一つ一つが、口に出して聞いたことをせずとも、眞実なのかどうなのかがただわかる。ここに来る前ならば、到底想像することすらできない現象に、すっかりと馴染み、日常生活と同じこととして受け取ってしまっている。

年頃の娘が食べるには、やや少ない量の朝食を食べ終え、箸を置く。

食べ終えた膳の上の惨状に、男が片眉を上げ、叱責の言葉を飛ばす。礼奈はふくれつ面でそれを受け取り、大人しく茶碗の中の体裁を整える。幾度も繰り返されるやりとりに、それでも男は根気よく彼女を叱り付ける。

「で、何すればいいわけ？」

「とりあえず本でも読んどけ？それだけは大量にある」

「めんどくせえ」

「女の子がそういう言葉遣いするのはダメだといつただろ？」

舌をだし、礼奈は食器を片付ける。

初日は汚く食べ散らかしたあげくに、そのままどこかへ行こうとした礼奈だが、カミサマの一言で何かに取り付かれたかのように強制的に食器を片付けさせられたあげく、どういうわけか家中を掃除するはめになつたせいか、大人しくここに規則にしたがつてゐる。それでも、食べ方だけは上達はみられないが、箸の使いかただけはややましになつた。それを褒める人間はここにはいないのだけど。

「退屈う

「本でも読め」

畳敷きの部屋に仰向けに寝転がりながら、礼奈は足をばたばたさせていた。

それをしたところで寝めるものはいいとはおもはず、ただ男がわざわざばかり眉根を寄せただけだ。

「あたしばかだし」

「やうやつて卑下しどきや樂だよな」

一刀両断される会話にも慣れ、少しもへこたれずに礼奈は続ける。

「漫画とか」

「ねーよ」

「雑誌とか」

「ないつたらない」

「ああああああああああああああああ

四肢をばたつかせ、礼奈の叫びが屋敷に響く。

その声に驚いたのか、屋敷の中に居る「何か」が気配を振るわせる。当初はその何かに一々びくついでいた彼女だが、月日が流れることでいつしか馴染んでいった。

ふいに姿を現す人ならぬ者は、どちらかといえば礼奈に脅えるほど氣の小さいものが多く、先ほどの礼奈の声でいくつかは屋敷から逃げていったようだ。

「うるさい」

叫び疲れてだらつと手足を投げ出した彼女に、男が叱責の声をあげる。

一人きりで暮らしてきた彼は、静寂を好み、このどちらかといえればやかましい小娘が空間を乱すことを良とはしていない。

だが、自分に責任がないとは言い切れないせいか、男は同じ部屋に彼女がいることを許容している。

それでもその距離は徐々にではあるが、縮まっていった。全ての疑問を飲み込み、ただ居心地のよさに身をゆだね、礼奈は男と供にあることを選んだのだから。

ゆるやかに時は流れる。

全く伸びない髪の毛と、成長しない手足。

礼奈は、幾年かたつた後、ようやくカミサマに尋ねた。

「そういえば、あたしついでひっこにきたの？」

「それ、最初に聞くべきじゃないか？」

「最初に話すことじじゃない？」

縁側に並んで座り、何かが飛び回る庭を一人で眺めるのはこのところの日課だ。

得体の知れない男として一定の距離を保つていた礼奈も、いつしか彼に慣れ、そして生意気な小娘だと思っていた礼奈に、彼も幾ばくかの親近感を覚え始めた頃からの距離感だ。

触れる、わけでもないその距離は、それでも礼奈を安心させるには十分だった。

「イケニエ、つて言つたよな？」

「それは聞いた」

クラスメートの実家に誘われ、それが今まで見たことのない山奥の

田舎の村だつたため、どういうわけか受諾し、そして礼奈は現在に至つてゐる。

蚊帳をつゝた畳の部屋で寝たところまでは覚えているのだが、いまどうしてここにいるのかは彼女にはさっぱり記憶がない。

無意識に、縛られていた痕があつた手首をさすりながら、彼の顔を見つめる。

灰色の男。

何もかも薄い灰色に彩られた男は、人形のように美しい。

そして、人形のよう人に間味を全く感じられない。

灰色の瞳が、礼奈を捉え、彼女はその中に自分の姿がうつりこんでいることを知る。

記憶にあるこの自分と全く変わらない自分、が。

「こじが閉鎖的な村だつていうのはわかるよな？」

「よく、わからないけど、私が遊びに行つた日に、随分色々な人にじろじろ見られた覚えはあるけど」

同級生に連れられて、あの村に足を踏み入れたときの感覚は、一言で言うならば不快なものであつた。

ちらちらと覗き込むくせに、声を掛けるわけでもない。さらにこちらが見返せば、突然家の中に隠れてしまう、といった扱いはどう考へても気持ちのよいものではない。

さらには、気がつけば視線を感じ、挨拶一つしない後姿を見送つてばかりなのは、鈍感な礼奈にしたところで滅入るものだろう。

「で、水不足だつたんだな」

「そうだっけ？」

「礼奈が住んでたところはまあ関係ないがなあ」

水不足、と聞いたところで、礼奈に全く実感がこもらないのも無理

はない。彼女の住む街は、非常に豊富な水源を持ち、また川からの取水が減少しようとも、いくらでも地下から水が沸いてくることでは有名だからだ。周辺の市町村が渇水に喘いでるなか、彼女の街だけは体育の授業で水泳の時間を減らさなかつたのだから、どれほど水不足と縁遠かつたかがわかるだろう。

「どういうわけか昔から使ってた地下水が枯れたみたいでね、運の悪いことに」

村の人口は少ない。だから日々を暮らせるだけの水量を確保することは出来ないことはない。だが、さらに農業だの畜産だのとなれば話は別だ。

追い詰められた村人たちとは、どういうわけか昔ながらの方法に縋ろうとしていた。

つまりは、村を守る鎮守さまへ生贋を捧げよ、と。

「ばかじゃない？」
「ばかなんだよなあ」

冷静に考えれば、そのような非現実的な事をしても無駄だ。市町村レベルで援助を請う方が先だろう。

だが、閉鎖的な村において、狭い考え方をする彼ら彼らは、最も安易で愚かな方法をとってしまった。

それを、愚鈍である、と切って捨てるのは簡単である。

だが、彼らの中には彼らの中で息づいた法則があり、規則がある。因習、とも呼べる彼らは、彼らを容易に縛り、身動きをとれなくさせる。

誰が言い出したかもわからないそれに、あつという間に群がり、村はそちらの方向へなだれ込んでしまった。

幾乎かの後ろめたさが、彼らに誰にも探されない少女を求めさせ、

それに合致したのがたまたま礼奈だったのだ。

「それあんだけ熱心だつたんだ」

同級生からもやや浮いていた自分を誘つた理由を理解した礼奈は、僅かに肩を落とした。

家の中にも居場所がない彼女にとって、その誘いはかすかな明りを照らすようなものだつたのだから。

「で、雨降ったの？」

「いつかは降つたんじゃね？たぶん

「カミサマじやないの？」

「そんな大層な力もつてねーよ。もつてたらこんなとこいねーって

それは、確かにその通りである、と、礼奈は周囲を見渡す。閑寂な、と言えば聞こえはよいが、何もない木々の中に取り残されたかのようにたたずむ日本家屋、わずかばかりの庭。それだけが礼奈のいる空間だ。

気まぐれに森の中を歩くものの、そこには稀に動物たちが紛れ込むぐらいで、何か楽しいものがあるわけではない。どういうシステムになつてているのかはわからないが、人ならぬものが現れ、新鮮な食材や男が求める本などを置いていく。

彼によると、ここは色々な道が交錯する場だというが、礼奈はよく理解してはいない。

「まあいいや

「いいのかよ」

「生活が変わるわけじゃないからねー」

そう言って礼奈は男に自らの背中を寄せ、初めてその体重をかけた。

わずかばかり寄つた眉根も、それ以上不快を表すことはなく、二人は日が暮れるまでただじつとそこにいた。

その四

ここは交差する「場」だから。

男が言つたことを、あたしが理解できているわけじゃない。
だけど、留まつたのはあたし一人だ、ということだけはわかる」と
ができた。

それがちょっとだけ嬉しくて。

誰かの特別になつたような気がしていいたんだ。

「ん? 迷子」

人ならぬものの気配で満ちている屋敷の中で、それ以外の、つまり
は人を見かけることが初めてだつた礼奈は思わず声をあげた。

声に気がついたのか、男児は足を止め、周囲を見渡し突如大声で泣
き始めた。

子供の世話などしたことがない礼奈は、ただおろおろとするばかり
で、大きな音が苦手な何かたちはただひつそりと遠巻きに子と礼奈
を見守つていた。

「うるせーなー」

のつそりと男がやつてきて、男の子を片手で抱き上げそして森の方
へと歩き去つてしまつた。

ただぽかんとそれを見送ることになつた礼奈は、男の子が立ちすべ
んでいた場所と、彼らの行く先を交互にみやる。
ほどなくして帰つてきた男は、少年を連れてはいなかつた。

「どうにやつたの？」

「返したんだよ」

「返した？」

面倒くさがりに答える男は、それでも礼奈の問いを無視することはない。うるさいやつだ、という表情を隠さうともせず、それでも相手を務めている。

「たまごのなんだよ。ああやつて迷こいもやつが」

礼奈は、じるじるやつてやつてやつてきたのかを覚えてはいない。気がつけばここにいて、住み着いている。

なおも疑問の表情を浮かべる礼奈に、男は続ける。

「子供が多いんだがな、この空間に落ちるやつがまれにいる。大抵は俺が気がついてとつと元の世界に返すんだがな」

「元の、世界」

「ああ」

どれほど未練がない、と言い切らうが感傷が浮かびあがるのは致し方がないことだろう。彼女を取り巻く環境全てが、彼女にとつて苛酷であつたといつわけではないのだから。

「帰りたいのか？」

ふいに落とされる優しげな声音に、礼奈は慌てて首を振る。

「元の、世界にいたい、と思つ気持ちは事実だからだ。

「まあ、おまえはまだ出れない、がな」

ただうなずき、男の後に続いて縁側に腰掛ける。

拳一つ分ほど開けた距離が、男と礼奈の心理的距離である。稀に起す、礼奈の甘えた素振りを拒絶する男ではないものの、いつもいつも素直にそれを現すほど、礼奈は彼に心を許してはいない。ただ、二人の間に流れる空気は随分と穏やかなものになつたことを、彼女はまだ気がついていなかつた。

初めて男の子を見つけて以来、礼奈は、稀に通り過ぎる人間へは声を掛けずにただ見過ごすように心がけていた。

大抵は気がつかずに庭を通り過ぎてゆき、そしてどこかへとまた帰つていく。

それは交差した道の中から、正しい道へと進む過程であり、男もそれに手を加えることはない。

ひどく迷子になってしまった場合のみ、男は重い腰を上げて手を貸すものの、そういう事態は頻繁に起こるわけではない。

「あの人たち、ちゃんと帰れるの？」

「まあ、大抵は」

「帰れなかつたら？」

「どこか他の場に行くこともあれば、時間軸がひどく狂うこともあるようだ。所謂神隠しつてやつだな」

「そう」

ただ通り過ぎていく人間たちに過度な同情心など生まれるわけもない礼奈は、男の淡淡とした説明をただ耳にしていた。

「おはよっ」

庭におぼろげな姿を現したそれに、礼奈は挨拶を投げかけた。ゆらり、と姿がゆれ、小さく会釈をしたようにみえた。

それに礼奈は笑みで返し、盆の上に置かれた湯飲みを手にした。ここに現れる人ならぬものはひどく臆病である。騒いでさんざんそれらに脅えられてしまつた彼女は、慣れるにつれこのような態度と距離感を会得した。

日常に埋没してしまえば、それらに怖いと思うことはない。静かな一日が始まろうとしたといひで、それは唐突に破られた。

「あれえ？」」「ビー？」

鮮やかなワンピースを着た女が、忽然と庭に現れ、驚いたような声を発した。

途端、それらは姿を消し、縁側に座つた礼奈だけが取り残された。女は礼奈の姿を認めると、ほつとしたような顔をして、近寄つてきただ。

久しぶりに見る人間に、礼奈は戸惑い、そして困惑していた。

ここのが場が混線し、こうやって人が現れることがあることだ。だが、このような妙齢の女性が落ちてきたのは初めてだからだ。まして、礼奈は返す方法を知らない。

曖昧に笑顔を作つたところ、女は滝のように勢いよく話し始めた。耳にきついその声を、ああ、私はこんな風にあの男に思われていたのだな、とぼんやりと思いながら聞き流していく。

綺麗に色が塗られた爪、明るい色に染めた髪、そして礼奈が記憶していたものとは異なる趣の衣服を眺めながら。ようやく、女が落ち着いた頃に、男はのつそりと彼女たちの間に現

れた。

「あ・・・・・・」

そう言つたまま押し黙つた女は、明らかに男に見惚れている様子だ。確かに男は、一度見たら忘れられないほどの美貌を持つている。灰色の髪も灰色の目も、浮世離れした彼の美しさを際立たせている。だが、そんなものはただの表層にしか過ぎない。

頬を染め、先ほどまでの勢いはどこかへいったような女を見つめる。この男の、何かを感じ取ることはできないのかと。

「お嬢さん、送りますよ」

男は、礼奈にはあまり見せる」とのない笑顔で、女の背中に手を当て促す。

自然顰めてしまつた顔に気がつく」となく、礼奈はただ一人の後姿を見送つた。

機嫌が急降下した礼奈は、程よく沸かされた風呂に乱暴に身を沈めた。

彼女にとつては少しぬるめの湯が全身に行き渡る感触を楽しむ。息を吐き、軽く両腕を伸ばし、ゆつたりと肩まで湯に沈める。

徐々に落ち着いた頭では、どうしてあれほど感情を乱してしまったかを考えていた。

ある日突然迷い込んだ場所で出会つた正体の知れない男。

それ以上でも以下でもない存在。

だが、自分にはない柔らかな曲線を持つ女に、殊更甘やかな顔を見る男を見ていてことができなかつた。

それを第三者に問えば、嫉妬だと明瞭な答えが返つてくるのだろう。生憎と、その問いに答えるものはここにはいない。

迷路に迷い込んだ思考のおかげで、随分と長湯をした礼奈は、すつ

かりのぼせた体に浴衣をだらりと羽織り、引きずるよつとして風通しのよい部屋へと歩いていった。

男は、当たり前のよつに縁側に座し、いつものように書物に目を落としていた。

人ならぬものは庭先で駆け、まるで先ほどの出来事がなかつたかのようだ。

「いたの」

僅かに書物から顔をあげ、立ちすくんだままの礼奈に視線を寄こす。男はあからさまに顔を顰め、乱暴に書物を閉じる。

「おまえな、その格好はなんとかならんのか」

羽織つただけの浴衣はその役目を果たしておらず、袂からは礼奈の白い体がすっかりと覗いている。
慌てて衿を掴み、体を隠す。

「おまえ、誘つてんのか？」

「ばかじゃないの」

「まあ、おまえのそれじゃあなあ」

初めてかけられた性的なからかいに慌てふためく礼奈をよれに、男は余裕の表情をみせる。

「どうせ小さいわよ」

初対面で男がした失言をしつこく覚えていたのか、礼奈が勢いよくくつてかかる。

年頃の娘、と言つには年月がたつているが、意識の上ではまだそ

だと自認している礼奈は、やはりいつも自分が大層気に掛かる。

「あれほどとは言わないがなあ」

男が、明らかに先ほどとの女の肢体を思い出すかのよつた軽口をたたき、さらに礼奈を挑発していく。

膝を詰めるかのように男のそばまで近寄った礼奈は、男の胸倉をつかみ小声を続ける。

それをつぶやくとするでもなく、男はただにやつこた笑みを浮かべている。

「あのな、おまえいいかげんにしろよ、その格好」

手で押さえていた裕は、彼女が手を離せば用意にはだけ、あつさりと礼奈の裸をむき出しにする。

慌ててそれをおさえ、なおも睨みつける彼女の頭上に、ふいに男の右手が降りてきた。

優しく幼子をあやすかのような仕草に、礼奈は虚を突かれたような顔をした。

いてもいい、とその存在を認められてはいた礼奈だが、男に優しくされたことも優しい言葉をかけられたこともない。僅かな接触を許されるのみだった彼女は、だが、それだけでも十分なほど満足していた。

邪険にされない、ただそれだけのことがどれほど嬉しいことかを礼奈は知っていたから。

「なんで泣いてんだよ」

知らずに流れ落ちた涙は、新しい彼女の浴衣を濡らしていく。

男が、礼奈を抱き寄せる。

男の体温を感じた礼奈は、さりげなく静かに泣き続ける。

「礼奈」

甘やかに自分を呼ぶ声に、礼奈は顔を上げる。

男は、乱暴に礼奈の頬を拭う。

礼奈は、初めてもつとこの男の近くにいたい。そう思った。

その五

あの男の体温は嫌いじゃない。

ここにいていいって、思わせてくれるから。

好きだと嫌いだとか。

そんなことはわからない。

ただ、必要とされるのがこんなに嬉しいだなんて知らなかつた。

礼奈が数えることをやめたほど季節が過ぎていったころ、男と彼女の距離はいつのまにかひどく縮まっていた。

甘やかで濃密な空気が支配する中、礼奈は蚊帳の中でしどけない姿をむらしていた。

ここでの生活は基本的に古典的衣装が多い。

どこから差し入れされるのか、礼奈によく似合つそれは、大人びた紬であつたり、艶やかな振袖であつたり。まるで季節も用途もばらばらなそれを、人でないものに着付けられ、いつしか礼奈も受け入れていた。

当然寝所では浴衣であり、昨夜は絨地にアジサイの白い花が散つたものを纏つっていたはずだ。

それはすでにどこかへと追いやられ、礼奈は掛け布団でその白い肌を隠す状態となっている。

隣には灰色の男。

不気味で正体もわからなくて、名前さえ知らぬ男。

一人きりの生活は退屈なようにみえて飽きることはなく、男の蔵書と時折運ばれる外界の情報、そしてなにより博識な男と会話をする

「」と日々を満足に過ごしていた。

「礼奈は帰りたくないの？」

いつしか呼び名さえ変化しており、二人の心理的距離も近いものとなっていた。

「ない」

「即答だねえ」

「居場所なんてないから」

時折思い出さないこともない家族は、自分を快く迎えることはないだろう。いや、ともすれば突然帰ってきた娘に困惑さえするだろう。礼奈はその時の情景をありありと思い浮かべることができ、ややうんざりとした表情を浮かべる。

男は頭を振った礼奈の首筋を撫で、そして自らの胸へ引き込んだ。お互いの体温が交じり合っていく。

礼奈は全てを委ね、そしていつしか眠りへと落ちていった。

きやらきやらと笑い声を上げ、子鬼たちが庭を駆け回る。

その姿を見ながら、礼奈は男と一人スイカにかぶりついていた。新しい浴衣を身につけ、うちわを縁側に置く。盛夏にふさわしい衣装と果物に、礼奈は満足していた。

「あのや」

「何？」

男の口端についた果汁をぬぐいながら礼奈が尋ねる。
知らぬことはない、と思わせるほど知識が広い男は、いつして彼女の問いかに答えることが多い。

「なんか、あの辺おかしくない？」

礼奈が指差す方向は、木々に埋もれた空間だ。

コケが生え、田差しは生い茂った木々に遮断されたそこは、ひつやりとして人々を寄せ付けぬ雰囲気をかもし出していた。

その空間が、どこかおかしいと気がついたのは最近のことだ。先の景色がゆらゆらと歪み、時折、先を見通せぬほど木々が折り曲がって見えるときがある。体一つ分ほど隣の景色を見渡せば、そこにはやはり木々が地面から正しく生えており、そこだけが何か異変を感じているようだ。

礼奈は何度も見返し、田をこすり、不思議に思つてようやく男へと疑問を口にした。

「ああ、ほころびだな」

「ほころび？」

「こここの空間は信心だけでもつてゐる」

「信心？あの社のこと？」

「まあ、あれだけじゃないが。そういうことだな」

「世話してくれる人がいなくなつた？とか？」

「だろうなあ。いや、よく持つた方じやねーか？さすがの田舎でもああいつたもんは廃れていくもんだらつ」

「ほころび続けたらどうなるの？」

「さあ」

「さあ？」

「わからん。俺はよそのカミサンのことは知らないし。この空間がなくなりちまうのがどうなのか」

「なんか、あの辺おかしくない？」

しゃくり、とスイカをかみ締め、まだ冷たい果肉の感触を確かめる。

「あのせ、そうしたら、あたしたちどうなるの？」

「消えるんじやね？」

その声にはかけらの寂しさも感じさせず、淡々としたものだ。

礼奈はその言葉に多少の驚きは示したもの、慌てることなくただ男の隣でスイカを食べ続けている。

「一緒に？」

「ああ」

「だつたらいいや」

礼奈は再び男の顔を拭い、自分の口元も丁寧にふき取る。

遊びつかれた子鬼たちは、笑顔のまま一人、また一人と別の場へと消えていった。

「まだ、先のことだからな」

男の背中に血らの背中を預け、礼奈は頷く。

ぎらぎらと照りつけていた太陽もいつしか沈みかけ、屋敷は再び夜の世界に支配されていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6167z/>

イケニエとカミサマ

2011年12月25日16時45分発行